

非存在言明のパズルと単称命題

酒井 智宏

キーワード: 非存在言明、単称命題、固有名、記述名、記述主義

要旨

この論文の目的は、固有名に関する記述主義をサポートする証拠とみなされてきた非存在言明のパズルが、実は、記述主義と相反する立場である単称主義をサポートするものであることを示すことである。固有名に関するもっとも素朴でもっとも直観にかなった考え方は、「固有名 = 個体につけられたラベル」という J.S.ミルに代表される考え方である。ところが、この考え方のもとでは「ペガサスは存在しない」のような非存在言明がパズルを引き起こすことが知られている。「ペガサス」によって指示される個体についてそれが「存在しない」と述べるのは矛盾でしかないからである。そこで、ラッセルは、自然言語の固有名が実は固有名ではなく偽装された記述であるとする記述主義を唱えた。しかし、クリプキが指摘したように、固有名に関する記述主義には問題が多い。それゆえ、もし可能であれば、ミル説と非存在言明の問題とを両立させることが望ましい。この論文では、非存在言明を文法的注釈とみなす野矢 (2002/2006) の考え方と、「切り裂きジャック」のような記述名を「いずれ記述を介さずに対象を指示できるようになることを期待された名前」とみなす Recanati (1993) の考え方を統合し、「PN は存在しない」が『PN は Q だ』は単称命題ではない (Q は任意の述語) を意味すると考えることで、ミル説と非存在言明の両立が可能であることを示す。『PN は Q だ』は単称命題ではない」という意味記述は単称主義を前提とするため、この意味記述を採用すれば、単称主義のもとで非存在言明のパズルが自動的に解決されることになる。

1. 存在文のパズル

固有名とは特定のものの名前のことである¹。これはあまりにも当たり前に思われるかもしれないが、この一見したところ当たり前の考え方がさまざまなパズルを生み出すことが知られている。そうしたパズルのうちの一つが非存在言明のパズルにほかならない。

このパズルを正確に理解するために、しばらく固有名についての素朴な考え方に寄り添っていくことにしよう。「固有名 = もの (個体、対象) につけられたラベル」「固有名の意味 = もの (個体、対象)」とする素朴な考え方は、通常、J.S.ミル (Mill 1843) に帰せられる。以下は言語哲学の代表的な教科書である Lycan (2000) からの引用である。

[Names] have their meanings simply by designating the particular things they designate, and introducing those designata into discourse. (Let us call such an expression *Millian* name, since John

¹ 日常ないし言語学の用語法では「固有名詞」と呼ばれることが多いが、この論文では哲学の慣例にならって「固有名」と呼ぶことにする。

Stuart Mill (1843/1973) seemed to defend the view that proper names are merely labels for individual persons or objects and contribute no more than those individuals themselves to the meanings of sentences in which they occur.) (Lycan 2000: 31-32)

これに対応すると思われる Mill (1843) の原文は次のとおりである。

[...] whenever the names given to objects convey any information, that is, whenever they have properly any meaning, the meaning resides not in what they *denote*, but in what they *connote*. The only names of objects which connote nothing are *proper* names; and these have, strictly speaking, no signification. (Mill 1843: 42-43, 強調は原文による。)

A proper name is but an unmeaning mark which we connect in our minds with the idea of the object, in order that whenever the mark meets our eyes or occurs to our thoughts, we may think of that individual object. (Mill 1843: 43)

一般に、言語表現は概念的意味（上記引用文中のミルの言い方では *what they connote*）と指示対象（*what they denote*）の両方をもつ。たとえば「猫」という語は猫という概念を表し、現実の猫を指示する。この二面性をもたない唯一の言語表現が固有名にほかならない。固有名は概念的意味をもたず、指示対象のみをもつ。それゆえ、「固有名の意味」というものがあるとすれば、それは指示対象以外のものではありえない²。このミルの考え方に基づくと、固有名を含む文は「もの（個体、対象）についての命題」すなわち単称命題（*singular proposition*）を表すことになる。たとえば(1)はロマン・ガリについての命題を、(2)はエミール・アジャールについての命題を表している³。

- (1) ロマン・ガリは 1956 年にゴンクール賞を受賞した。
- (2) エミール・アジャールは 1975 年にゴンクール賞を受賞した。

² これに関連して二つ注記しておきたい。第一に、「太郎」は男性名、「花子」は女性名という概念的意味をもつのではないかと思われるかもしれない。しかし、「男性名」「女性名」というのは文法範疇の名称であり、意味ではない。猫の概念を満たさないものは猫ではありえないが、「花子」という名前の男性は、原理上、存在しうる。ただ「変わった名前の男性」というだけというだけのことである。第二に、「太郎」は「最初に生まれた男の子」、花子は「花のような女の子」といった概念的意味をもつのではないかと思われるかもしれない。しかし、これは命名に際して込められる思いのようなものであり、名前が固有に担っている概念的意味ではない。その気になれば次男に「太郎」と名づけてもよいし、花のような子に育たなかったからと言って花子が花子でなくなるわけではない。語 X の概念的意味とは、当該の対象がそれを満たさなければ X でなくなるような条件のことであることに注意しなければならない。

³ 固有名の意味が指示対象だとすると、「ロマン・ガリ」や「エミール・アジャール」が誰をさすのか知らない人は、これらの固有名の意味を知らないことになり、そのぶん日本語の語彙が貧弱であることになる。しかし、これは直観に反する。日本語圏で使用されているほとんどの固有名の指示対象を知らない場合、「知り合いが少ない」とか「ものを知らない」とか言われることはあっても、「日本語が不自由である」と言われることはないだろう。このことは、固有名と対象を結びつける知識の本性は何かという問題を提起する。本論文ではこの問題とミル説との関係には立ち入らないことにする。Recanati (1993: Ch. 8) を参照。

こうした考え方はミルでなくとも思いつくような素朴なものである。しかし、まさにこの素朴な考え方が数々のパズルを引き起こす。そのうちの一つが(3)のような対象の非存在を表す言明である。

(3) サンタクロースなんて存在しない。

ミル説が正しければ、固有名「サンタクロース」はなんらかの対象を指示する。他方、述語はその対象について、それが存在しないと言っている。これは明らかに矛盾である。それにもかかわらず、(3)はごくふつうの文であり、矛盾したことを言っているとは感じられない。これが非存在言明のパズルである⁴。

このパズルに関しては、大きく分けて、「(3)の主語の『サンタクロース』はなんらかの意味で存在している」と考える解決法と、「(3)の主語の『サンタクロース』は実は何もさしていない」と考える解決法の二つがある⁵。以下、第2節で第一の解決法を、第3節で第二の解決法を取りあげる。

2. マイノグ主義

(4)の対話において、Bの言い分を「存在しない (と私が主張する) サンタクロース」について、Aはそれが存在すると言うんだ」と言い換えることができる。

(4) A: サンタクロースは存在する。

B: いや、サンタクロースは存在しない。

⁴ ミルの考え方が引き起こす別のパズルとして、(i)のような同一性言明 (identity statement) に関するパズルがある (cf. Frege 1892)。

(i) エミール・アジャールはロマン・ガリと同一人物だ。

固有名が特定物をさすと考えるかぎり、(i)のような文にはウィトゲンシュタインの指摘する問題がついてまわることになる。

Beiläufig gesprochen: Von *zwei* Dingen zu sagen, sie seien identisch, ist ein Unsinn, und von *Einem* zu sagen, es sei identisch mit sich selbst, sagt gar nichts.

ひとこと言うならば、こうである。二つのものについて、それらが同一であると語ることはナンセンスであり、一つのものについてそれが自分自身と同一であると語ることは、まったく何ごととも語っていない。(Wittgenstein 1922: 5.5303、野矢茂樹訳、強調は原文による。)

同一性言明のパズルについては Sakai (2012) および酒井 (2014) を参照。このほか、(ii-iii)のような文が提起する「単文のパズル」が知られている (Saul 1997, 1999, 2007)。

(ii) クラーク・ケントが電話ボックスに入って、スーパーマンが出てきた。

(iii) クラーク・ケントが電話ボックスに入って、クラーク・ケントが出てきた。

固有名の意味がその指示対象に尽きるなら、(ii)と(iii)は同義となるはずであるが、実際にはそのようには感じられない。単文のパズルをめぐる議論については藤川 (2014) を参照。

⁵ 一見したところ、第二の解決法はミル説の廃棄を要求するものであるように思われるかもしれない。しかしながら、第3節で見ると、実際にはこの解決法はミル説と両立可能である。

この言い換えの下線部が意味をなすためには、ある意味で「存在しないサンタクロース」が存在しなければならぬ。さもなければ、AとBは何についても語っていないという奇妙なことになってしまう (cf. Quine 1953: Ch.1)⁶。AもBも、サンタクロースがある意味では存在することには同意している。紛らわしいので、その意味での存在を存立 (subsistence) と呼ぼう。AとBが論争しているのは、サンタクロースが、存立する (subsist) という性質に加えて、存在する (exist) という性質をもつかどうかに関してである。この考え方は、オーストリアの哲学者・心理学者マイノングにちなんで、マイノング主義と呼ばれる。

マイノング主義の問題点は「存立 (する)」の定義が不明であることである。おそらく、「サンタクロースが存立する」とは、それが存在 (ないし実在) するかしないかにかかわらず、それについて思考したり語ったりすることができるということであると思われる。ところが、この考え方によると、(5)が可能であることから、われわれは「丸い四角」について思考することができることになってしまう⁷。

(5) 丸い四角なんて存在しない。

しかし、われわれは矛盾したことを思考することはできない (cf. Wittgenstein 1922, 野矢 2004: 141)。それゆえ、(5)が何について「存在しない」と言っているのか、おそらく話者自身も分かっている (野矢 2002/2006: 22)⁸。これを受けて、ラッセルはマイノング主義について次のような厳しい診断を下す。

私が思うに、まさにそうした実在に関する本能をはなはだ欠いていたのがマイノングです。丸い四角のような対象もある。それは存在しないだけで、あるいは存立すらしないけれども、それでもそのような対象はあるのだ、こうマイノングは言い張ります。「丸い四角は虚構だ」と言うときには、「丸い四角」という対象と「虚構」という述語があるのだと彼は解釈するのです。実在感覚を持つ人なら、誰も命題をそんな風に分析したりしないでしょう。(Russell 1956: 邦訳 93)

⁶ AとBが用いている文の主語は (なんらかの意味で存在する) サンタクロースをさすのではなく、サンタクロースの概念 (観念) のようなものを表しているのではないかと思われるかもしれない。このとき、Bの主張は「サンタクロースの概念は存在するが、サンタクロースは存在しない」というものになる。しかし、この考え方はうまくいかない。主語がサンタクロースの概念 (観念) を表すのであれば、AとBの主張はそれぞれ「サンタクロースの概念 (観念) は存在する」「サンタクロースの概念 (観念) は存在しない」となるが、これらはAとBが主張しようとしていることではないからである (Quine 1953: Ch.1)。

⁷ 「丸い四角」は固有名ではないので、本論文の主題から外れていると思われるかもしれない。しかし、「丸い四角」を太郎と名づければ、次の(i)で(5)と同じ意味を表すことができる。

(i) 太郎なんて存在しない。

マイノング主義によると、(i)の「太郎」は存立することになるが、この主張は「われわれは丸い四角について思考することができる」と述べているに等しい。

⁸ 野矢 (2002/2006) のページ数は2006年版のもの。これ以下も同様。

マイノング主義の変種として、(4)のような非存在言明の主語ではなく述語の意味のほうに手を加える方法がある。Kleiber (1981) は、非存在言明が可能なのは「存在する」(仏語 *exister*) が「特別な存在のあり方」(*une manière d'être spécial, un mode d'existence spéciale*) を表すためであると言う。たとえば、(4)の述語は「現実に存在するという主張」(*l'assertion de l'existence réel*) という「特別な存在のあり方」を表す⁹。しかし、(4)の述語の意味に手を加えたところで、主語の指示対象の存在に関する問題が解消するわけではない¹⁰。Kleiber (1981) の考え方では、(4)の「サンタクロース」が(特別な意味ではなく)ふつうの意味では存在することになるが、その場合の「存在」が何を意味するかはあいかわらず不明だからである¹¹。

以上のことから、非存在言明において主語が表す「存在」と述語が表す「存在」を区別する考え方はうまくいかないことが分かる。そこで、主語の指示対象の存在という考え方を完全に放棄したのが次に見る記述主義である。

3. 記述主義

ラッセルは、対象を指示するものだけが真の固有名であるとし、この点で、自然言語の固有名は、実は真の固有名ではなく、記述であると考えた¹²。ラッセルの主張はおおよそ次のようにまとめられる。(i) (日常言語の) 固有名は何も指示しない。(ii) 「固有名 = 何かを指示する表現」であるから、日常言語の固有名は実は固有名ではない。(iii) 真の固有名は論理的固有名である *this* や *that* である。(iv) ミル説は日常言語の固有名に対しては成り立たず、論理的固有名に対してのみ成り立つ。すなわち、ラッセルは、真の固有名に対してのみミル的な見解を確保し、通常固有名とされるものはそもそも固有名ではないと考えることで、非存在言明のパズル

⁹ Kleiber (1981) の主張については古川 (2005) を参照。Kleiber (1981) と古川 (2005) は、固有名ではなく、*les licornes* (英語 *the unicorns*) のようなフランス語の定名詞句について論じているが、固有名についても同様の議論が成立する。なお、マイノング主義ももともとは固有名ではなく確定記述 (*the* + 単数名詞) について唱えられたものである。

¹⁰ この方法がうまくいくこともある。Martin (1993) は、(i)の述語が、夫の社会的地位が低かったり、発言権がなかったりするために、「存在しないも同然だ」という状態を表すと述べている。

(i) *Son mari n'existe pas.* (Her husband does not exist.)

このように、存在述語が「存在しないも同然だ」という意味を表す場合、主語 (ここでは *son mari* [= her husband]) の指示対象はふつうの意味で存在すると考えてよい。こうした場合には非存在言明のパズルは生じない。

¹¹ もちろん、古川 (2005) が正しく指摘するように、述語が表すとされる「現実に存在するという主張」がいかなる理由で特別であるのかも不明である。Kleiber の分析は、述語が表す意味を不明確なものにし、それによって主語の指示対象の存在に関する問題を回避することもできていないことになる。

¹² 記述主義はもともと Russell (1905) が確定記述に関して提案した考え方である。確定記述とは唯一物をさすとされる表現のことであり、英語では「*the* + 単数名詞」で表される。この「唯一物をさす」という考え方が(i)のような文においてパズルを引き起こすことが知られている。

(i) *The present king of France is bald.*

(i)の主語は指示対象を欠いており、確定記述が唯一物をさすという考え方をとるかぎり、この文は無意味ということになってしまう。しかし、われわれは(i)の意味を理解することができ、そのかぎりにおいて(i)は意味をもつと考えられる。この問題を解決するために開発されたのがラッセルの記述理論にほかならない。それによると、確定記述は、表層の文法構造に反して、実は指示表現ではなく、いわば述語の一種であり、確定記述を含む文全体はその述語を満たす唯一の対象が存在することを述べる文となる。たとえば(i)の真の論理構造は「現在のフランス王である者が存在し、かつその者は禿であり、かつ他の何者も現在のフランス王ではない」という指示表現を含まないものとなる。このとき、(i)は無意味ではなく偽となり、パズルは解消される。記述理論を自然言語の固有名に適用したのが Russell (1956) である。

を回避しようとするのである。

[...]「ロムルスは存在した」もしくは「ロムルスは存在しなかった」という命題が引き合いに出しているのは、命題関数だということが分かります。というのも、「ロムルス」という名前は実は名前ではなく、圧縮された一種の記述だからです。それは、しかじかのことをした人物、レムスの殺害、ローマの建国等をしたある人物の代理をするものであり、そうした記述、たとえば「ロムルスと呼ばれた人物」という記述が省略されたものなのです。「ロムルス」は名前であるか名前でないかのどちらかです。仮に名前だとすると必ず何かを名指すので、存在するかどうかが問題になることはありえませんし、もしロムルスのような人物がいなかったとしたら、存在しない人物の名前などありえません。ですから、実はこの「ロムルス」という一つの語は、切り詰められ圧縮された一種の記述なのです。それを名前だと考えてしまうと、論理的誤謬に陥ることになります。記述だと認識すれば、ロムルスに関する命題はいずれも、(たとえば)「 x が「ロムルス」と呼ばれた」のような、記述を取り込んだ命題関数を引き合いに出すものと分かります。[...]そして「ロムルスは存在しなかった」と言うときには、その命題関数を真にするような x の値は一つもないということが意味されているのです。(Russell 1956: 邦訳 131-132)

この考え方によると、たとえば(4B)は『白いひげを生やし、赤い服を着て、毎年クリスマスにトナカイが引くそりに乗って世界中の子どもたちにプレゼントを配ってまわるような男性』という記述を満たすものは存在しない」という命題を表す。この命題は特定のものについての命題(単称命題)ではなく、 x に何を代入しても、「 x は白いひげを生やし、赤い服を着て、毎年クリスマスにトナカイが引くそりに乗って世界中の子どもたちにプレゼントを配ってまわるような男性である」という文が真になることはない、という一般命題を表している。こうした一般命題は、特定のものについての命題ではなく、丹治(2009: 226)の言うように「あらゆるものについて」の命題である。上記の一般命題は、存在するものの全体(あるいは宇宙)の中に当該の条件を満たすものがあると言っているのである。この命題のどこにもパズルを引き起こす要素はない。「ペガサスは存在しない」も同様であり、この文は、 x に何を代入しても「 x は翼をもつ馬である」という文が真になることはないという一般命題を表す¹³。

自然言語の固有名が特定物をさす表現ではなく圧縮された記述であるという考え方は、非存在言明をめぐる問題とは独立に、次の二つの事実によってサポートされる。第一に、固有名の意味を尋ねられた際に、それと等価な記述によって答えることができる(Lycan 2000: 35)¹⁴。

¹³ あるいはペガサスがもつとされる諸々の属性に対応する「ペガサス(pegasize)」という動詞をつくり、「ペガサスは存在しない」を「 x に何を代入しても『 x はペガサス』は真にならない」を意味すると考えることもできる(Quine 1953: Ch.1, cf. 丹治 2009, 八木沢 2013: Ch.5)。

¹⁴ もちろん、ロマン・ガリ本人を指さすなどして「あの人だよ」と答えることもできる。これは、固有名の記述(内包)を満たすもの(外延)でもって問いに答えていると考えられる。一般に、言語表現は内包と外延をもつから、「あの人だよ」という答えが可能であるという事実自体は記述主義に対する反論にはならない。これは、

(6) A: ロマン・ガリって誰?

B: 1956年にゴンクール賞を受賞したフランスの作家だよ。

第二に、特定物をさしてないことが明らかであるにもかかわらず固有名であると感じられる表現が存在する。そうした表現は記述名 (descriptive name) と呼ばれる (Evans 1982, Recanati 1993)。たとえば、「切り裂きジャック (Jack the Ripper)」は「1888年にイギリスで起きた連続殺人事件の犯人」という記述と等価であるが、そうした人物は特定されていない。同様に、「ヴァルカン (Vulcan)」は「水星の内側の軌道を公転している惑星」という記述と等価であるが、そうした惑星はないとされる¹⁵。

しかしながら、非存在言明のパズルを解決することと引き換えに、記述主義は多くの問題を抱え込むことが知られている。ラッセルは、ミルの見解を守ろうとするあまり、固有名と称されるものが実は固有名でなく、真の固有名は別のところにあると考えるようになった。このようにして固有名の固有名性を切り捨てることは、ミルの見解に負けず劣らず多くのパズルを引き起こす。

4. 記述主義の問題点

4.1 記述の理解と固有名理解とのズレ

記述主義の第一の問題点は、固有名と等価とされる記述を理解していなくても、固有名を理解していると言える場合があるということである (cf. Searle 1958)¹⁶。「パリ」を『広辞苑』で引

「ハクビシンって何?」という問いに対して「あの動物のことだよ」と答えることができるからと言って、「ハクビシン」という言語表現が内包をもたないことにはならないのと同じことである。

¹⁵ 記述主義によると、「エミール・アジャールはロマン・ガリだ」のような同一性言明も「xはロマン・ガリと呼ばれ、かつxはフランスの作家であり、かつxは1956年にゴンクール賞を受賞し、かつxはエミール・アジャールと呼ばれ、かつxは1975年にゴンクール賞を受賞した」という文を真にするxが唯一存在する、という一般命題に還元されることになる。

¹⁶ 記述主義に対する反論として、不完全な記述に関する議論が知られている (Lycan 2000: Ch.3)。不完全な記述に関する議論とは、われわれが唯一物を選び出せるほど豊かな記述を固有名に結びつけていなくても、なお固有名を理解していると言うことができる場合があることを根拠にして、固有名と記述が等価でないことを示そうとするものである。たとえば、われわれが「プラトン = 古代ギリシャの偉大な哲学者」、「アリストテレス = 古代ギリシャの偉大な哲学者」という程度の記述しか知らない場合でも、プラトンとアリストテレスが異なる人物の名前であることを理解することができるように思われる。

しかしながら、この議論には欠陥がある。というのは、われわれが「プラトン = 古代ギリシャの偉大な哲学者」、「アリストテレス = 古代ギリシャの偉大な哲学者」という図式のみをもってしていることはありえず、少なくとも、「プラトン = プラトンという名前をもつ古代ギリシャの偉大な哲学者」「アリストテレス = アリストテレスという名前をもつ古代ギリシャの偉大な哲学者」という図式をもってしているからである。これらの記述はそれぞれ唯一物の取り出しに成功し、かつ、プラトンとアリストテレスの区別にも成功する。したがって、不完全な記述という問題は生じない。同様に、Lycan (2000: 42) および八木沢 (2013: 191) は「キケロ = 有名なローマ時代の雄弁家」としているが、これを「キケロ = キケロという名前をもつ有名なローマ時代の雄弁家」とすればやはり不完全な記述の問題は回避される。

このように、「不完全な記述」に基づく記述主義批判の妥当性は慎重に検討される必要がある。本節の記述主義批判はこうした批判とは異なっており、ある記述が唯一物の取り出しに成功する場合でも、その記述とそれに対応する固有名が等価でないことを示そうとするものである。

なお、「プラトン」「アリストテレス」「キケロ」などがそれぞれ複数の対象と結びつく場合には、たしかに

いてみると、「フランス共和国の首都。国の北方、パリ盆地の中心部に位置し、セーヌ川にまたがる。[……]」と記述されている。これが「パリ」の意味であるならば、パリ生まれのパリ育ちでありながら、パリがパリ盆地の中心部に位置することを知らずに生きてきた人は、「パリ」という名前を長年使ってきたにもかかわらず、「パリ」の意味を知らないことになる。この点で、記述主義は、名前についての理解と、名前がさすものについての理解を混同しているように思われる。

この問題は、洗練された記述主義である Searle (1958) の「記述の束」説 (cluster theory of reference) によって回避することができると思われる (Lycan 2000: Ch.3)。記述の束説によると、名前には複数の記述がゆるやかに結びついており、言語使用者はこのうち、対象の特定に必要なかつ十分なだけの記述を知識としてもっていればよい。「パリ」を例にとると、この名前がさす対象の特定には「フランス共和国の首都」といった記述だけで十分であり、「パリ盆地の中心に位置する」という記述を知っている必要はない。

しかしながら、記述の束説は、そのゆるやかさゆえに、同音異義名を適切に捉えることができないという問題に直面する。山田太郎という人物が二人 (山田太郎 1、山田太郎 2) いて、これらの人物に対して、「a. 弁護士である」「b. 札幌市出身である」「c. 博多に住んでいる」「d. 太宰府天満宮を三度訪れたことがある」「e. 50 歳である」「f. 結婚している」などの記述が結びついているとしよう。このうち、たとえば、山田太郎 1 と結びつけられるのが記述 a, b, e であり、山田太郎 2 と結びつけられるのが c, d, f であることを保証してくれるものは何だろうか。「山田太郎 1」に記述 c を結びつけるのが異物混入であると言えるためには、「山田太郎 1」がさすものをすでに知っている必要があるのではないだろうか。この点で、記述の束説は、ミル説を前提としているのではないかという疑念をぬぐい去ることができない。

この疑念は、固有名に結びつけられる記述が変化する際に先鋭化する。「山田太郎」に関して「2015 年 9 月 1 日にポーランドを訪れた」という記述が新たに加わったとする、このとき、この記述を「山田太郎 1」に結びつけるべきか、それとも「山田太郎 2」に結びつけるべきかは、2015 年 9 月 1 日以前の時点で「山田太郎 1」「山田太郎 2」に結びついている記述を完璧に理解していたとしても、判断することができない。この判断を可能にするのは、「山田太郎 1」「山田太郎 2」がさすものに関する知識のみである。このことは、対象の特定が記述の特定に先行することを示唆している。

記述の変化にまつわる問題は、次の事実によっても示される。3 歳時点の山田太郎 1 と 50 歳時点の山田太郎 1 にはあまり共通点はないだろう。年齢はもちろん、人相も身長も体重も職業も、大きく変化している。同様に、50 歳時点の山田太郎 1 と 50 歳時点の山田太郎 2 にもあまり共通点はないだろう。このとき、結びつけられる記述の違いにもかかわらず 3 歳時点の山田太郎 1 と 50 歳時点の山田太郎 1 が同じ人物をさすのに対して、結びつけられる記述の違いに応じて 50 歳時点の山田太郎 1 と 50 歳時点の山田太郎 2 が異なる人物をさしていると言いたく

「プラトン/ アリストテレス / キケロという名前をもつ～」という記述は唯一物の取り出しに失敗する。こうしたケースは本節で論じる同音異義名に関する問題に還元される。

なるのは、われわれが山田太郎1と山田太郎2のさすものが異なることを知っているからにはほかならない¹⁷。この点で、記述の東説はミル説を前提としている。

4.2 ゲーデルシュミット問題、もしくは誤った記述

記述主義の第二の問題は、Kripke (1980) によって論じられた「誤った記述」をめぐるものである。「ゲーデル」という固有名が「不完全性定理を証明した人」という記述と結びつけられ、言語共同体に流通しているとしよう。ところが、通説に反し、実はゲーデルは不完全性定理を証明しておらず、実際に証明したのはシュミットという無名の人物であったとする。シュミットは怪死を遂げ、ゲーデルはシュミットの業績を盗んで自分の名前で発表した。この状況で、

(7) ゲーデルは不完全性定理を証明した。

という文は、直観的には偽である。ところが、記述主義では、「ゲーデル」という名前の定義により、(7)は(8)と同義になってしまう。

(8) 不完全性定理を証明した人は不完全性定理を証明した。

(8)は「AはAだ」(A = 不完全性定理を証明した人) という形の恒真文であるから、いかなる事実が明らかになろうとも、けっして偽とはなりえない。他方、(7)が偽となりえないというのはわれわれの直観に著しく反している。それゆえ、(7)と(8)を同義とみなす理論は受け入れがたい。不完全性定理を証明したのが誰であれ、「ゲーデル」はゲーデルその人をさす。記述主義ではこの当たり前の事実が見失われてしまうのである。

4.3 固有名名の消去不可能性

記述主義では、固有名の意味はそれと結びつけられる記述 (の束) によって定義される。この立場の問題点のひとつは、固有名を定義する記述の中に別の固有名が現れ、その固有名を消去しようとするときにさらに別の固有名が現れ、という具合に、永久に固有名を消去することができないように思われる場合があることである (Sakai 2012、八木沢 2013: 192)。「ロマン・ガリ」を例にとろう。

(9) ロマン・ガリ

¹⁷ すべての時点の「山田太郎1」と「山田太郎2」と結びつけられる記述の共通部分を取り出して、それぞれを「山田太郎1」「山田太郎2」の本質の意味とする、などというのはナンセンスである。このようにして取り出される共通点は「1900年生まれの人間で、性別は男性、血液型はX型」といった乏しい内容になると思われる。こうした記述を満たすものは多数存在するが、それらがすべて山田太郎1/山田太郎2であるわけではない。ではどうしてその中の一つだけが山田太郎1/山田太郎2だと言えるのか。その答えはやはり、われわれが山田太郎1/山田太郎2がさすものをすでに理解しているからだ、ということになるだろう。

- a. = 1956 年にゴンクール賞を受賞した作家
- b. = 1956 年にフランスでもっとも権威ある文学賞を受賞した作家
- c. = 1956 年にヨーロッパ大陸西部のほぼ六角形の国土をもつ共和国でもっとも権威ある文学賞を受賞した作家
- d. = ?

「ロマン・ガリ」を(9a)のように定義すると、記述の中に「ゴンクール」という固有名が現れる。「ゴンクール」という固有名を消去するために、「ゴンクール賞」を「フランスでもっとも権威ある文学賞」と言い換え、(9a)を(9b)の記述によって定義すると、こんどは「フランス」という固有名が現れる。「フランス」という固有名を消去するために、「フランス」を「ヨーロッパ大陸西部のほぼ六角形の国土をもつ共和国」と言い換え、(9c)を(9d)の記述によって定義すると、こんどは「ヨーロッパ」という固有名が現れる。このような言い換えを続けることにより、いつか固有名を含まない記述に到達することができるかどうかははっきりしない。同様に、「ロマン・ガリ」を(10a)のように定義し、次いで(10b)のようにして「ジーン・セバーク」という固有名を消去しようとする、記述に含まれる固有名の数がかえって増えてしまう。

(10) ロマン・ガリ

- a. = 1970 年にジーン・セバークと離婚した人物
- b. = 1979 年にパリで自殺したアメリカ出身の女優と離婚した人物
- c. = ?

また、「ロマン・ガリ」を(11a)のように定義すると、場所の固有名が増殖し、(12a)のように定義すると、(12b)でふたたび「ロマン・ガリ」を用いたい誘惑に駆られる。

(11) ロマン・ガリ

- a. = 1914 年に現在のリトアニア (当時のロシア帝国) で生まれ、1980 年にパリでピストル自殺したフランスの作家
- b. = ?

(12) ロマン・ガリ

- a. = 『天国の根 (Les racines du ciel)』を書いた作家
- b. = ロマン・ガリが 1956 年に発表した作品を書いた作家
- c. = ?

もちろん、以上の議論は、いかなる方法によっても固有名を消去することができないということを示すものではない。しかし、真の問題は、いつか固有名を消去することができるかどうかではなく、仮に固有名 PN を、固有名をいっさい含まない記述 D と結びつけることに成功した

としても、われわれが PN の意味を D によって理解しているとは思えないという事実である。

4.4 様相文脈における固定指示性

可能性や必然性にかかわる文脈 (様相文脈) では、一見等価に見える固有名と対応する記述が異なるふるまいをすることが知られている (Kripke 1980)。(13)は理解可能な文であるが、対応する記述を用いた(14)は理解が困難である。少なくとも、(14)を(13)と同義な文として解釈することはできない。

(13) 1956年にゴンクール賞を受賞した作家が1956年にゴンクール賞を受賞しないこともありえた。

(14) ロマン・ガリがロマン・ガリでないこともありえた。

同様に、(15)(17)をそれぞれ(16)(18)と同義な文として解釈するのは難しい。

(15) この小説では、1956年にゴンクール賞を受賞した作家がフランソワーズ・サガンだ。

(16) この小説では、ロマン・ガリがフランソワーズ・サガンだ。

(17) この小説では、1956年にゴンクール賞を受賞した作家は女性だ。

(18) この小説では、ロマン・ガリは女性だ。

クリプキの用語を用いると、こうした解釈の違いは、固有名が固定指示的である (あらゆる可能世界で同一の対象を指示する) のに対して、記述は固定指示的でない (異なる可能世界で異なる対象を指示しうる) ことから生じる。この固有名と記述の性質の違いにより、記述主義が想定する「固有名 = 省略された記述」という等式は成り立たないことになる。

4.5 説明対象の問題

記述主義における真の固有名とは、記述に還元することができず、対象そのものをずばりさす表現にほかならない。ラッセルによると、この定義を満たす表現は this や that といった指示代名詞であり、ラッセルはこうした表現を「論理的固有名」(logically proper name) と呼んだ。しかしながら、言語学が問題にするべきことは、「何を真の固有名と呼ぶべきか」ではなくて、「われわれが固有名だと思うものは何を意味するか」ということである (Recanati 1993, 酒井 2013-2014)。ラッセルがいくら「パリ」「ロマン・ガリ」「山田太郎」などが真の固有名ではないと言っても、われわれにとってこれらはまぎれもなく固有名であると感じられる。それゆえ、言語学的観点に立つかぎり、これらを記述に還元し、固有名に関する議論から除外するラッセルの立場は受け入れがたい。

以下では、ミル的な考え方に寄り添いながら、非存在言明のパズルの解決を試みる¹⁸。

5. ミル説の枠内における非存在言明のパズルの解消

5.1 文法的注釈としての非存在言明

固有名に関するもっとも素朴な見解であるミル説によると、固有名の意味はそれがさす対象に尽きる。しかし、ミル説は、われわれが(19)のような非存在言明を矛盾なく理解することができるという事実を説明することができない。

(19) ペガサスは存在しない。

第3節と第4節で見たように、このパズルを解決するために、(19)の主語がなんらかの意味で存在する (=存立する) ペガサスを指示するとするマイノング主義と、(19)の主語は実は固有名ではなく、記述にすぎないとする記述主義が提案されてきた。マイノング主義によると、(19)は「存立するペガサスが『存在する』という性質はもたない」という意味を表し、記述主義によると、(19)は、「x に何を代入しても『x は翼をもつ馬である』という文が真になることはない」という一般命題を表す。しかしながら、第3節と第4節の議論により、どちらの立場にも深刻な問題があることが明らかとなった。

主語の固有名が何かをさすと考えても何もささないと考えても深刻な問題が生じるのではパズルの解決は不可能であるように思われるかもしれない。しかしながら、ここには野矢(2002/2006)によって示された抜け道がある。それは、(19)のような非存在言明を、ミル説の枠組みでの固有名に関する文法的注釈とみなすものである¹⁹。野矢(2002/2006)の提案はWittgenstein(1922)の見解(20)に沿ってなされたものであるが、(20)は固有名の意味が指示対象に尽きるとするミルの見解と整合的である。

(20) Nur der Satz hat Sinn; nur im Zusammenhange des Satzes hat ein Name Bedeutung.

(命題のみが意味内容をもつ。名は、ただ命題という脈絡でのみ、指示対象をもつ²⁰。)

Wittgenstein(1922)の枠組みのもとで、野矢(2002/2006: 334-335)は、(19)が「ペガサスという名前を用いて有意義な文を作ることはできない」という文法的注釈にほかならないと考える。この文法的注釈はミル説を前提としたものであり、かつ、その文法的注釈の中にかなる矛盾も含まれない。それゆえ、野矢の解決策を採用すれば、ミル説の枠内で非存在言明のパズルが解消されることになる。

¹⁸ 本論はミル説を洗練させた Kripke(1980)、Evans(1982)の「歴史的・社会的説明」と呼ばれる立場を念頭に置いている。しかし、そこまで立ち入らなくても以下の議論を理解することは可能である。

¹⁹ (i)のような同一性言明に対しても同様の解決が可能である。Sakai(2012)を参照。

(j) エミール・アジャールはロマン・ガリと同一人物だ。

²⁰ 野矢茂樹訳に従った。同書訳注(19)(pp.186-187)も参照。

ミル説の言うように「ペガサス」の意味が指示対象に尽きるならば、「ペガサス」が有意味であるためにはペガサスが指示対象をもたなければならない。それゆえ、「ペガサスは存在しない」は「ペガサスという名前を用いて有意味な文を作ることはできない」を意味する。この議論はきわめて整合的であり、議論の構造自体に特に問題にすべきことはない。しかし、これが実際の言語事実を正しく記述しているかどうかはまた別の問題である。野矢説は、(21)の文法的注釈を受け入れる人にとって(22)はナンセンスであると予測する（野矢 2002/2006: 136-137）²¹。

(21) サンタクロースは存在しない。

(22) サンタクロースが近所の子もたちのためにプレゼントを運んできた。

しかしながら、(21)を受け入れる人でも(22)を有意味な文と判断することはじゅうぶんに可能であるように思われる。少なくとも、サンタクロースの存在を信じない通常の大人でも、(22)をまったく理解不能な文と判断することはまれであり、(22)は偽なる命題を表すと判断するのがふつうだろう。実際、「サンタクロースは存在しない。それゆえ、サンタクロースが近所の子もたちのためにプレゼントを運んでくることはありえない」という信念は矛盾しているとは感じられない。この信念は、(21)と(22)の否定から構成されている。(22)の否定が意味をなすということは、(22)も意味をなしており、これをナンセンスと考えることが不適切であることを示唆している²²。また、ある種の神話のもとでは(22)は真であると判断されることさえあるかもしれない。こうしたことから、野矢説は非存在言明の意味記述としては強力すぎるのが分かる。そのため、ミル説に寄り添いつつも、(21)を受け入れることがただちに(22)がナンセンスであることを帰結することがないように、野矢説を弱める必要がある。

5.2 記述名

野矢説を弱めるにあたって、記述名 (descriptive name) の性質がヒントになる。第3節で述べたように、記述名とは、特定物をさしていないことが明らかであるにもかかわらず固有名であると感ぜられる表現のことである。たとえば「切り裂きジャック (Jack the Ripper)」は「1888年にイギリスで起きた連続殺人事件の犯人」という記述と等価であるが、そうした人物は特定されていない。同様に、「ヴァルカン (Vulcan)」は「水星の内側の軌道を公転している惑星」という記述と等価であるが、そうした惑星はないとされる。こうした名前が可能なのは、名前 NN が何かの名前となるとき、その「何か」にこれといった制限はないため、Recanati (1993)の言う

²¹ Wittgenstein (1922) の枠組みでは、「無意味」(独: sinnlos) と「ナンセンス」(独: unsinnig) が区別される (野矢 2002/2006: 122-123)。「無意味」が「常に真となる文 (恒真文)」および「常に偽となる文 (矛盾文)」に対して用いられる概念であるのに対して、「ナンセンス」は真偽を問うことさえできない音列ないし文字列に対して用いられる概念である。この区別のもとでは、「サンタクロースは存在しない」を受け入れることは、「サンタクロース」という音列ないし文字列を含む文がナンセンスであるという事実を受け入れることに等しくなる。

²² 一般に、有意味な文とその否定はどちらも有意味である (cf. Wittgenstein 1922)。

ように、「何であれ、記述 D を満たすものを NN と名づける」ことが可能であるからである。

[...] proper names are characterized by the fact that there is a convention pairing them with an object (the bearer of the name). The convention is of the form: ‘The bearer of NN is ...’, what fills the blank being the specification of an object. Nothing prevents the specification in question from being descriptive: ‘The bearer of “Julius” is whoever invented the zip’. (Recanati 1993: 177)

こうして、「誰であれ、1888 年にイギリスで起きた連続殺人事件の犯人を『切り裂きジャックと名づける』、「何であれ、水星の内側の軌道を公転している惑星を『ヴァルカン』と名づける」、「何であれ、翼をもつ馬であるものを『ペガサス』と名づける」、「誰であれ、白いひげを生やし、赤い服を着て、毎年クリスマスにトナカイが引くそりに乗って世界中の子どもたちにプレゼントを配ってまわる男性を『サンタクロース』と名づける」、「A 社長を誘拐した人物を『怪人 21 面相』と名づける」といったことが可能になる²³。

では、記述名を名前と呼んでよいのだろうか。この問いに対してイエスまたはノーというはっきりした答えを求めると、混乱に陥る。いま、記述名 DN があるとしよう。何かを名づけたという点では DN は名前のはずであるが、他方、誰も DN の指示対象を DN として認識したことがないという点では一人前の名前ではない。記述名についてはこの二面性に留意する必要がある。Evans (1982) の用語を用いてこの二面性を述べるならば、典型的な名前が生産者 (producer) と消費者 (consumer) の両方をもつものに対して、記述名は生産者をもたないという点で特殊であると言える。ここで、固有名 N の生産者とは、対象 O を知覚したことがあり、かつ O を N として再認することができる人たちのことであり²⁴、固有名 N の消費者とは、対象 O を一度も知覚したことがないか、または、O を知覚してもそれを N として認識できない人たちのことである²⁵。Evans (1982) の言うように、生産者が存在せず、「何であれ記述 D を満たすものを DN と名づける」ということが行われたにすぎない段階では、記述名 DN は記述 D と等価であり、論理的ないし真理条件的に DN と D を区別することはできない。

In saying that the thought expressed by ‘Julius is *F*’ may equivalently be expressed by ‘The inventor of the zip is *F*’, I think I am conforming to common sense. Someone who understands and accepts

²³ さらに『丸い三角』を太郎と名づける」ということさえ可能になる。固有名とは対象につけられた名前ではなく、関心につけられた名前であるという野矢 (2011: 416-419) の考え方に基づくならば、固有名による命名には文字どおり制限がなくなる。

²⁴ もちろん、ときに誤認が起きる可能性は排除されない。

²⁵ 本論とは関係しないが、映像、写真、肖像画などによる対象の特定が「知覚」に含まれるのかという問題がある。これについては、おそらく「含まれる」と考えるべきであると思われる。たとえば、マダガスカルを知覚に基づいて作られた地図の上でマダガスカルを特定した時点で、マダガスカルを知覚したと言ってよい。なぜなら、実際に地上に降り立ったときに、「これが地図で見たマダガスカルか」と再認することができるからである。これに対して、想像に基づいて描かれたムー大陸の地図を見ても、ムー大陸を知覚したとは言えない。あくまでも、映像、写真、肖像画などが実物の知覚に基づいていることが重要である。ただし、仮にわれわれがニュートンの肖像画を見たとしても、実物のニュートンを再認する機会がないため、マダガスカルの場合と異なり、われわれはわれわれが生まれる前に没した人物をさす固有名の生産者となることはできない。

the one sentence as true gets himself into exactly the same belief state as someone who accepts the other. Belief states are distinguished by the evidence which gives rise to them, and the expectations, behaviour, and further beliefs which may be derived from them (in conjunction with other beliefs); and in all these respects, the belief states associated with the two sentences are indistinguishable. We do not produce new thoughts (new beliefs) simply by a ‘stroke of the pen’ (in Grice’s phrase) – simply by introducing a name into the language. (Evans 1982: 50)

しかし、だからと言って、記述名と記述がまったく同じものになるわけではない。Recanati (1993) が強調するように、たんなる記述と異なり、記述名は特定の個体を固定指示的にさすことが意図されているのである。

[...] the reference of a proper name *must* be thought of non-descriptively, but this, suitably understood, is consistent with the existence of descriptive names. For there is a crucial distinction between the way the reference of a proper name *is* thought of (*de facto*), and the way it has to be thought of (*de jure*). *De facto* the reference of ‘Julius’ is thought of descriptively, because it is known only by description; but this is consistent with the fact that, *qua* proper names, ‘Julius’ *requires* that its reference be thought of non-descriptively.

(Recanati 1993: 178, 強調は原文による。)

I conclude that it is a mistake to think of a descriptive name such as ‘Julius’ as being essentially (or intrinsically) descriptive. The fact that its referent is known only by description is purely contingent. Far from essentially descriptive, a name such as ‘Julius’, like any other proper name, demands that its referent be thought of non-descriptively. If we use a descriptive *name* rather than a description, this is precisely because we look forward to a richer state of knowledge in which we will be able to think of the referent non-descriptively. A descriptive name such as ‘Julius’, ‘Neptune’, or ‘Jack the Ripper’ is created only in the expectation that more information about the bearer will accumulate, thus eventuating in the possibility of thinking of the latter non-descriptively. This possibility is simply *anticipated* by the use of a descriptive name. (Recanati 1993: 180, 強調は原文による。)

すなわち、記述名の指示対象が特定されていないのは逸脱的な事態であり、いずれは指示対象が特定されることが期待されている。言い換えると、記述名を含む文は、個体に関する命題、すなわち単称命題 (singular proposition) を表すことが期待されている。この期待の有無が記述名とたんなる記述を区別する基準となる。この区別のため、「連続殺人犯」がたんなる記述であるかぎり(23a)が矛盾するのに対して、「切り裂きジャック」が名前であるかぎり(23b)は矛盾しない。(23b)は、現実世界では連続殺人を犯した特定の人間が、小説中では犯罪に手を染めない人間として描かれているということを述べている。

- (23) a. この映画では、連続殺人犯が殺人を犯さない。
b. この映画では、切り裂きジャックが殺人を犯さない。

記述主義は自然言語の固有名が真の固有名ではなく記述の省略にすぎないと考えたが、実際にはこの逆が正しく、自然言語の固有名は、それと結びつけられる記述にもとづき、固定指示的に対象をさすことを志向している。この対象志向性は記述名の場合もいささかも変わるところがない。現時点で記述名の指示対象は特定されていないが、いつかは特定されるという期待が記述名には織り込まれているのである。

記述と名前のこの違いをふまえるならば、Recanati (1993) が正しく指摘するように、先に見た Evans (1982) の発言は修正されなければならない。

If I am right, we cannot accept Evans's words at face value when he says that 'someone who understands and accepts the one sentence [e.g. "Julius is *F*"] as true gets himself into exactly the same belief state as someone who accepts the other [e.g. "The inventor of the zip is *F*"] ...' (Evans 1982, p.50). What is true is this: in the envisaged situation, the same belief state corresponds to both utterances, as Evans rightly insists. But it is not true that the thinker in this situation fully understands the utterance with the name 'Julius'. To fully understand this utterance, one would have to think of the referent non-descriptively – something that is simply not possible in the envisaged situation. It is precisely because the thinker does not fully understand the utterance with a proper name in it that he forms the same belief state in connection with both utterances.

(Recanati 1993: 188, note 9)

記述を記述のままにせず、わざわざ記述名による名づけを行うのは、その名前を含む文が単称命題を表しているはずだという期待があるからである。この単称命題を理解することができてはじめて、その記述名を理解したことになる。単称命題に到達できないうちは、たしかに記述名は記述と等価であるが、その段階では記述名を完全に理解したことにはならない。

5.3 固有名の小切手的使用

一見したところ、前節で見た記述名は、指示対象が特定されていないという点で、固有名の中でも周辺のなものであると思われるかもしれない。しかし、野矢 (2011) の指摘するとおり、実際には大半の固有名が記述名的な性質をもっている。

「中村さんは毎朝海岸で逆立ちするらしいよ」「中村さんって、誰?」「中村実さん。知らなかったっけ。ぼくの友人なんだけどね」—このやりとりにおいて、聞き手はまだ「中村実」という未知の固有名の意味を理解してはいない。それゆえまた、その新たな対象を論理空間

に取り込むこともできていない²⁶。このやりとりにおける聞き手の理解は、「野矢の友人で「中村実」という人がいるんだ」というところにとどまっている。だが同時に、必要とあらば話し手に頼んでその人物に会わせてもらうとか、その人物を特定できるような十分な記述を教えてもらうといった仕方、自分も中村実氏を同定する能力を身につけることができるだろうという了解をもつ。ここにおいて「中村実」という固有名は、いわば「小切手」のように働いていると言えるだろう。聞き手はそれを「換金」しようと思えばできる。すなわち、いざとなれば対象に出会わせてもらうとか、さらなる記述を与えてもらい、その対象を自分の論理空間に取り込むことができる。もし話し手がでまかせを言っていて、そんな対象が存在しなかったとするならば、それは「不渡り」ということになる。ここにはまだ論ずべきことが多く残されているが（そして私はそれについてまだ明瞭な見通しをもっていないが）、ともあれ、固有名を用いたわれわれの会話の中には、ごくふつうのこととして小切手的なやりとりが行われているということ、これはとても興味深く、かつ重要なことであると、私には思われる。（野矢 2011: 158-159、強調は原文による。）

「中村実」という名前をはじめて耳にした人にとって、「中村実」とは「中村実という名前を持ち、野矢氏の友人である人」といった記述と等価な記述名でしかない。このように、相手にとっては一人前の固有名であるものが、私のボキャブラリーの中では記述名にとどまっているということのごくふつうにある。野矢 (2011) の言い方では、このとき、私にとってその固有名は小切手の状態にとどまっている。Evans (1982) の言い方では、このとき、私はその固有名の消費者 (consumer) である。一般に、「顔と名前が一致しない」とき、その名前は私にとって小切手の状態にあり、私はその名前の消費者であると言ってよい。この観点に立つならば、すべての日本語話者にとって、日本語圏で使用されている固有名の大半が小切手であり、彼らはそれらの固有名の消費者であることになる²⁷。第3節で見た「切り裂きジャック」のような記述名の特殊性は、そうした記述名が誰にとっても小切手的であり、それゆえ生産者 (producer) をもたないという点に求められる。すなわち、通常の固有名が大半の人にとって小切手的であるのに対して、記述名はすべての人にとって小切手的であるということである。それゆえ、通常の固有名と記述名の違いは、程度の問題であって、質の問題ではない。

5.4 非存在言明の意味

5.2 節と 5.3 節で論じた固有名の性質をふまえるならば、非存在言明の意味を次のように規

²⁶ 野矢はここで Wittgenstein (1922) の「論理空間」(logische Raum) という用語を用いている。「N の指示対象 O を論理空間に取り込む」は Evans (1982) および藤川 (2014) の用語を用いると「N ファイルによって対象 O を指示することができるようになる」と表現することができる。これは日常の用語で言えば「N の指示対象 O を特定することができる」ということに等しい。

²⁷ 大半の固有名について、その指示対象の特定が不可能であるという事実を根拠にして、固有名は当該言語の一部ではない考える立場がある (Recanati 1993)。藤川 (2014) はこの考え方を批判し、固有名は当該言語の一部であると述べている。しかし、藤川 (2014) の批判は Recanati (1993) の誤読に基づいた不適切なものである。この問題については稿を改めて論じたい。

定することができる。

(24) PN は存在しない \Leftrightarrow 「PN は Q だ」は単称命題ではない (Q は任意の述語)

記述を記述のままにせず、名前をつけるのは、それを含む文が単称命題を表しているはずだという期待があるからである。しかし、この期待は裏切られることもある。切り裂きジャックはけっきょく見つからなかった。野矢 (2011) の言い方では、この名前は不渡りだった。この時点で、「切り裂きジャック」を含む文が単称命題を表すという期待は捨て去られる。この期待の放棄を述べるのが「切り裂きジャックなんて存在しない」という文にほかならない。

小切手が換金可能性があってこそ小切手であり、換金の可能性がなくなったらただの紙切れになるのと同じく、固有名 PN は単称命題を形成する可能性があってこそ固有名であり、単称命題を形成する可能性がなくなったら、もはや固有名ではない。固有名でないとしたら、何か。固有名でなくなった PN の運命には二通りが考えられる。ひとつはナンセンスな音列に降格するという運命であり、もうひとつは記述として再解釈されるという運命である。実際、5.1 節の(21)の非存在言明を受け入れたとき、(22)の文に対しては両方の反応が可能であるように思われる。(21)を受け入れた場合の(22)に対する可能な反応のひとつは、「(22)は日本語の皮をかぶったナンセンスな戯言にすぎない」といったものである。この場合、「サンタクロース」はナンセンスな音列とみなされていることになる。(21)を受け入れた場合の(22)に対するもうひとつの可能な反応は「(22)は真実ではない (すなわち偽なることを述べている)」といったものである。この場合「サンタクロース」は記述として再解釈され、(22)は「ある x が存在し、x は『白いひげを生やし、赤い服を着て、毎年クリスマスにトナカイが引くそりに乗って世界中の子どもたちにプレゼントを配ってまわるような男性』という記述を満たし、かつ x は近所の子どもたちにプレゼントを運んできた」という一般命題として理解されている。これを満たす x が存在しない以上、(22)は偽なる命題を表すことになる。なお、5.2 節で述べたように、(22)は神話の中では真なる命題を表すと判断することもできる。その場合、(22)は「神話において、ある x が存在し、x は『白いひげを生やし、赤い服を着て、毎年クリスマスにトナカイが引くそりに乗って世界中の子どもたちにプレゼントを配ってまわるような男性』という記述を満たし、かつ x は近所の子どもたちにプレゼントを運んできた」という一般命題として理解されていることになる。このとき、神話の中に x を埋める要素が存在するかぎりにおいて、(22)は真となる。

非存在言明(21)を「サンタクロースという名前を用いて有意味な命題を作ることはできない」という文法的注釈とみなす野矢 (2002/2006) の説では、(21)を受け入れることが(22)がナンセンスであることをただちに帰結し、われわれの(22)に関する直観と一致しないという問題があるのであった。これに対して、本節で提示した説においては、(21)を受け入れた場合でも(22)が有意味な命題 (すなわち真なる命題または偽なる命題) を表す可能性が確保されており、野矢説が抱える難点を克服することができる。

6. おわりに

固有名が特定の対象をさすとする単称主義のもとでは、「PN は存在しない (PN = 固有名)」という型の非存在言明は矛盾でしかなく、そのかぎりにおいて、自然言語の PN が実は固有名ではなく、圧縮された記述にすぎないとする記述主義をサポートするようになる。しかしながら、記述主義のもとでは、非存在言明のパズルが解消されることの代償として、どの自然言語にも記述と固有名の区別が存在するという事実が見失われてしまう。「ローマを建国した人」という記述と「ロムルス」という固有名はたんなるパラフレーズの関係にあるのではなく、両者に対する言語使用者の態度は決定的に異なっている。すなわち、「ローマを建国した人」と異なり、「ロムルス」は個体をさすことが期待されている。言い換えると、「ロムルス」を含む文は、特定の個体に関する命題、すなわち単称命題を表すことが期待されている。そのため、もしも「ロムルス」がさす個体が特定されたならば、「ロムルスはほんとうにローマを建国したのだろうか？」などと問うことさえ可能になる。これは「ローマを建国した人はほんとうにローマを建国したのだろうか？」という問いが意味をなさないのと対照的である。逆に、「ロムルス」が何もささないことが判明したならば、「ロムルス」は固有名としての地位を失い、無意味な音列に降格されるか、「ローマを建国した人」と等価な記述として再解釈される。これは「ローマを建国した人」という記述にあてはまるものがなくてもなんら問題がないのと対照的である。

こうした事実をふまえると、「ロムルスは存在しない」という非存在言明は『『ロムルスは Q だ』(Q = 任意の述語) という文は単称命題を表さない』という文法的注釈として解釈することができる。いわば、「ロムルスは存在しない」という言明によって、「ロムルス」が固有名でないことが宣言されるのである。記述主義の誤りは、「PN は存在しない」における PN の位置に入りうるものはいずれも固有名ではないと考えた点にある。これに対して、本論文の分析によると、「PN は存在しない」における PN の位置に実際に入ったものだけがその瞬間にはじめて固有名としての地位を失う。

この議論が正しければ、非存在言明が可能であるという事実は、自然言語の固有名が何もささないことを示しているのではなく、むしろ積極的に個体をさそうとする表現であることを示している。自然言語の固有名が積極的に個体をさそうとする表現であるからこそ、その期待が裏切られたことを表現する非存在言明が同じ自然言語の中に用意されているのである。この意味において、非存在言明は、いささかも記述主義をサポートするものではなく、むしろ単称主義を前提とした言明にほかならない。自然言語から固有名という範疇を消去しようとする記述主義の考え方は進むべき方向が逆であり、一般の言語使用者の直観どおり、固有名は個体をさし、固有名を含む文は単称命題を表すことが期待されているのである。

付記

本研究は科学研究費補助金 (基盤研究 (C)、研究代表者: 酒井智宏、課題番号: 25370437 「意味排除主義に基づく固有名と単称性に関する研究」) の助成を受けて行われた。

参考文献

- Evans, Gareth (1982) *The varieties of reference*, Oxford University Press.
- Frege, Gottlob (1892) Über Sinn und Bedeutung, *Zeitschrift für Philosophische Kritik C*, S, 25-50.
- 藤川直也 (2014) 『名前に何の意味があるのか—固有名哲学』 勁草書房.
- 古川直世 (2005) 「フランス語における定冠詞の内包指示用法について」『フランス語学研究的
現在』 白水社.
- Kleiber, Georges (1981) *Problèmes de référence : descriptions définies et noms propres*, Klincksieck.
- Kripke, Saul. A. (1980) *Naming and necessity*, Harvard University Press. 『名指しと必然性』 産業図書.
- Lycan, William G. (2000) *Philosophy of language: A contemporary introduction*, Second edition, Routledge. 『言語哲学: 入門から中級まで』 勁草書房、2005年.
- Martin, Robert (1993): Sur le paradoxe de la prédication d'inexistence, *Le Français Moderne*, LXI-No.1 : 1-10.
- Mill, John Stuart (1843) *A system of logic*, Longmans.
- 野矢茂樹 (2002 / 2006) 『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』、哲学書房、2002年 / ちくま学芸文庫、2006年.
- 野矢茂樹 (2004) 『はじめて考えるときのように—「わかる」ための哲学的道案内』 PHP 文庫.
- 野矢茂樹 (2011) 『語りえぬものを語る』 講談社.
- Quine, W.V.O. (1953) *From a logical point of view*, Cambridge, Mass: Harvard University Press. 飯田
隆 (訳) 『論理的観点から』 勁草書房、1992年.
- Recanati, François (1993) *Direct Reference*, Blackwell.
- Russell, Bertrand (1905) On denoting, *Mind* 14: 479-493.
- Russell, Bertrand (1956) *The philosophy of logical atomism and other essays 1914-19* (The collected papers of Bertrand Russell 8), Allen & Unwin Ltd. 高村夏輝 (訳) 『論理的原子論の哲学』 ちくま学芸文庫、2007年.
- Sakai, Tomohiro (2012) L'énigme des énoncés d'identité de type « a=b » : Une solution grammaticale, 『フ
ランス語フランス文学研究』 101: 23-37.
- 酒井智宏 (2013-2014) 「失われた固有名を求めて」『ふらんす』 2013年9月～2014年3月、白水
社.
- 酒井智宏 (2014) 「メンタル・スペース理論と認知言語学」『東京大学言語学論集 (TULIP)』 35:
277-296.
- Saul, Jennifer (1997) Substitutions and simple sentences, *Analysis* 57: 102-108.
- Saul, Jennifer (1999) Substitution, simple sentence, and sex scandals, *Analysis* 59: 106-112.
- Saul, Jennifer (2007) *Simple sentences, substitution, and intuitions*, Oxford University Press.
- Searle, John (1958) Proper names, *Mind* 67: 166-173.
- 丹治 信春 (2009) 『クワイン—ホーリズムの哲学』 平凡社ライブラリー.
- Wittgenstein, Ludwig (1922) *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul. 野矢茂樹 (訳)

『論理哲学論考』岩波文庫、2003年。

八木沢 敬 (2013) 『意味・真理・存在—分析哲学入門・中級編』講談社選書メチエ。

The Puzzle of Non-existential Statements and Singular Propositions

Sakai Tomohiro

Keywords: non-existential statement, singular proposition, proper name, descriptive name, descriptivism

Abstract

The purpose of this paper is to show that the puzzle of non-existential statements, which has long been considered to support Descriptivism, can in fact be accounted for within Singularism as suggested by J.S. Mill. The Millian view on the semantics of proper names regards proper names as labels for individuals. This view, however, is known to give rise to a puzzle when confronted with a non-existential statement such as “Pegasus does not exist”, to the extent that the statement denies the very existence of Pegasus denoted by the subject NP. According to Descriptivism as defended by Russell, this puzzle suggests that alleged proper names in natural language are not proper names in the true sense of the term, but disguised descriptions. Since Descriptivism raises more problems than it solves, however, it is better to find a solution for the puzzle within the Millian framework. By drawing on Noya’s (2002/2006) idea that non-existential statements are nothing but grammatical statements on the use of proper names, as well as on Recanati’s (1993) view that *de jure* any proper name demands that its referent be thought of non-descriptively, this paper argues that the statement “PN does not exist” means that for any predicate Q, “Q (PN)” fails to express a singular proposition. The fact that this semantic description presupposes Singularism as opposed to Descriptivism suggests that, against the traditional conception mentioned above, non-existential statements raise no puzzle for the Millian view on proper names.

(さかい・ともひろ 早稲田大学)